
Yellow mist~黄霧~ LAST

K-hell

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Yellow mist~黄霧~ LAST

【Nコード】

N84240

【作者名】

K-hell

【あらすじ】

黄霧ウィルスが全日本を覆う世界荒廃の最終章。黄霧の中で最後に救われるのは一体誰か？

LAST 黄霧の夜〜イエローミストナイト〜
？過去の複製

無条件の12卿解体と天下の悪法の新治安維持法の廃止が議会で可決した。支配階層は消滅した。

するとワクチンを管理していたフミヅキ卿がその供給を止め雲隠れした。旧『ディアスポラ』のメンバーが犯人とされた。

メンバーはすぐに招集した。元とは言え仲間の裏切りは衝撃的だった。犯人がすぐわかってしまったこともある。

「私は忙しい中、来たのよ」

軍のワクチン班に転属になったマツリダは、隈の取れない顔で苛立った。

「そのワクチンの供給がストップしたんだろう。仕事なんかあるのかよ」

連戦で重油臭いカトウは、それでもおどけて茶々を入れる。

「さて、この場に招集していない人間は誰だ？」

セツナはボタンに重ぼったそうな目を向ける。わかりきっているじやん。サツサがいない。

「サツサこと、フミヅキ卿にどう裁きを下そうか」

セツナの瞳の奥で渦巻くものがあつた。きっと個人的な恨み以外にも複雑な思いがあるのだろう。

RRR：以前セツナが修理していた携帯電話が鳴る。数十年前の遺産が奏でる音は、その場の緊張感を増やした。

「大変です！フミヅキ卿が各階層で、黄霧ウイルスステロを始めました！被害が拡大しています：ワクチン接種をしたはずの人間にも、すでに多くの死者が出たとの報告です」

興奮したミナヅキ卿の声が一同を騒然とさせた。ついに始まった『テロ』そして、投与されたワクチンが偽薬^{ブラシーボ}だったとは想定^{想定}の範囲外だった。

携帯が叫ぶ。

「残るワクチンはフミヅキ卿と数人のテロ賛同者の手の内です。ハヅキ卿がフミヅキ卿の立て籠もる『トウエルブタワー』に突入しましたが、ウイルス兵器により重態になりました：早く応援を下さい！！」

セツナは冷静になるため、この場を見まわした。もう騒ぎ立てる人間はいなかった。みんな彼女の指示を静かに待っていた。

ついに始まったか。セツナは自分が12卿から『初代ディアスポラのリーダー』に救われてから幾年が経っていたことを噛みしめた。今度は自分が決断する時だ！

「ウイルスがばら撒かれたエリアから住民をすみやかに退避させる部隊とワクチンをフミヅキから奪い返す部隊に分かれよう！我々はあらゆる暴力に対して抗うために団結する！！いざ離散^{ディアスポラ}！！」

カトウ、マツリダは部隊を率いて一般人の救出に向かった。ボタンはセツナと2人でサッサの待つ『塔』へ向かう。

ボタンはガスマスクを装着したが、セツナはしなかった。あの黄霧から逃走した時と同じだ。今まで理由を話そうとしなかった訳が、ようやくセツナによって語られた。

「ボタン聞いてくれ。私は特殊な黄霧ウイルス感染者だ。特殊能力の『空間認知能力』を得た代わりに『全身の血液』を失った。私が『貧血』のような症状を起こす理由は、血液の代わりに私の体内を流れる『黄霧ウイルス抗体』だ。」

「そ…そうなんだ」

セツナが服の袖をまくった。腕に残る無数の針の痕が生々しく、その肌は赤く腫んでいた。セツナの服はいつも長袖。一体彼女は、どんな思いでウイルスの蔓延する社会を見ていたのだろう。

「つまり、私は自分の体液を取り戻しに行くんだ」

セツナはただの人間でないことはボタンもわかっていた。今、その胸中はどんよりしていた。逃げずに闘っていたセツナの隣に、一度逃げようとしたボタンが立っていた。ただ恥ずかしい。無情にも時間は進むだけだ。

？逆転写

『トゥエルブタワー』を包囲していた黒衣の軍隊は、セツナの帰還

に歓声を上げた。今でも不敗のムツキ卿の人気は健在だった。ミナヅキ卿はようやく合流できた安堵感からか少し潤んだ目になっていた。

「お待ちしておりました！」

「ハヅキは生きているか」

ミナヅキ卿は涙を拭い、セツナたちを特別隔離されたテントに案内した。

ハヅキ卿は喀血を繰り返したのだろう。青白い肌に頬骨と目のくぼみが目立っていた。セツナも気付いていたのだろうか。ここまで病状が深刻だったら医師もさじを投げる。

「気分はどうです…とは言っても優れないようですね」

セツナはいつもの無表情だった。それでも死の淵に立つハヅキ卿は微笑んだ。ヒューヒュー喉が鳴っている。

「すまない…後を君たちに任せるしかないようだ」

その消え入りそうな声にセツナは無言で頷いた。ボタンはハヅキ卿に見覚えがあった。あの夜の潜入していた仲間のひとりだ。

「その通りだよ。ウガイ君と君には申し訳なかった。どうやら裏切りの最期はこんなものらしい」

「いいえ、あたし達の方が軽率でした。逃げることしか選べなかったんですもん」

「そうか、君は…君の『正しさ』を貫いて…」

言葉は続くことはなかった。セツナは脈を取ったが、横に首を振った。

ボタンはしばらく心の隙間を埋められず呆然と立ち尽くした。人の死は時間を止めてしまう。

傷心を癒やす間もなく、2人の卿候は打倒フミヅキの話をしている。合理的過ぎる人間だ。

「ハヅキ卿らが侵入した正面入口は、侵入者を感知して黄霧ウィルスを噴射するトラップが仕掛けられています。ダイナマイト等による爆破は、連日の動乱で耐震強度の下がったこの場の支柱が崩壊す

る危険がありお勧めしません」

ミナヅキ卿の表情が曇る。

「確かに空間の歪みを感じる。これ以上の地盤への負荷は、この『新東京』を本当にグランドゼロに変える」

『罨を壊さず無力化する』か『罨を避けて侵入する』か。敵も12卿のために余り時間をかけていられない。何をされるかわからない。セツナの表情がさらに硬い。危険分子は…

「ウヅキ卿か。あいつの罨に対する執念は並みでないからな。罨に悪夢が詰まっているように思える。正面入口の罨は奴が管理しているのか？」

「恐らく自動電動式オートモードでしょう」

オートならば塔に停電を起こせばいい。塔は自家発電している。地下へ降りて、制御システムを破壊しなければならぬ。

「奴の手で改良された黄霧ウイルスを1μ？でも肺に入れたらあの世逝きだ。コンピュータシステムよりはやく通過するより他ならぬ

い…やれるか？」

セツナはミナヅキ卿の能力を知っていた。『神速ダッシュ』。12卿の韋駄天が彼の異名だった。

12卿は『異能者』が多い。少年もまたそうだった。黄霧で親しい人を失いながらも彼自身は生きていた。

戦時中の学校法『能力開発研究制度』にあった。ボタンのような非凡な人間はあまり学校へ通いたくなるシステムだった。研修生^{シード}と呼ばれる学生は、来る日も来る日も拷問のような研究開発訓練を受ける。

12期生として入学した彼はちよつとしたことから、その『脚』が対象になっていた。脚が破れるような激痛と毎日闘った。そして徐々に『生きる気力』を削がれていった。

そこに特別教官として現れたのが、当時12卿に選ばれたばかりのセツナだった。

セツナはミナヅキ卿に慰めや同情を一切かけなかった。言われた言葉は『死んでしまえ』とか『それなら脚をノコギリで切ろうか』とか常軌を外していたが、『死への渴望』を埋めてくれる彼女の言葉

をミナヅキ自ら求めるようになっていった。

この理由は後付けだが、3期生として卒業していたセツナに対する憧れもあった。3期生の能力はケタ違いと噂されていたからだ。セツナも弟ができたのが満更でなかったらしく、彼を不器用なりに可愛がった。

だがしかし彼がセツナの後を追って12卿になった年、セツナの父と兄があ的事件を起こし、責任問題で彼女は12卿を去った。

そして12卿の敵である反政府組織『ディアスポラ』として彼女は再び現れ、彼の前に立ち塞がった。ミナヅキは姉と慕う彼女だからこそ容赦なく戦った。どんなに苦しい環境でも彼女が追い詰める。だから彼は『生きている』実感があった。

ミナヅキ卿に生きる意味を教えてくださいましたセツナの頼みは絶対だ。例えば死んでも断らない。

「身命を賭してやってみせます」

どんな物体であれ運動の始まりは『加速時間』がかかる。離陸前の飛行機が滑走路を走るのがいい例だ。ヒトでは重力に逆らわず、地面と身体を平行にして加速するのが理想とされる。

V1（速度1）。ミナヅキは加速段階に入った。トップスピードでセンサーの感知を上余らなければならない。入口突破に失敗すれば、黄霧の餌食だ。

V2（速度2）。深海へダイビングしたような窒素圧が全身にかかる。窒素が血管を押し開く茨の激痛が全身を走る。カールルイスの幅跳びのように宙を駆け抜け、入口は突破した。身体を前転させ、ブレーキをかける。トラップは作動しなかった。

彼の心臓は異常収縮を起こし縮んだために、肋骨の間はひどく凹んだ。彼は何事も無かったかのように立ち上がり、中層3階のコントロールセンターまで駆け降りた。物理法則も生体反応も無視でき、さらに初速を除いて運動が酸素に依存しない。これが脳研12期生の実力だった。

彼は残留している黄霧ウイルスが恐れたが、超人の奇跡的に感染することなくドア前に立っている。手榴弾を投げつけドアを破壊する。

爆風や黄霧ではなく以外にもミナヅキを襲撃したのは、無数の光線だった。スローモーションのように光が彼を襲ってくるように見えた。実際の光の速さは30万キロメートル毎秒だ。

一瞬の後退。人間離れた彼でも紙一重で、身体が粒子化して消滅する一歩手前だった。血も流れないが、左手の指は第二関節まで吹っ飛んだ。いい加減調子に乗りすぎた。今度はないかもしれない。

「あら、裏切りの姉中毒者^{シスコ}。結局、あんたが来たのね」

少女の身体にはコンピューターから伸びる配線が接続されていた。12 卿の天才罫師、ウヅキ卿は自らの身体を兵器にして待ち構えていた。針のように細い無数の銃身がまるで触手のようだった。

ミナヅキ卿と同期でも、能力に目覚めるのが遅かったウヅキ卿は学校でいじめの対象だった。東京事変前の彼女は、父親が政府直属の技術者とか同期の噂で聞いた。

そして、彼女は3対3模擬訓練で5人を剣山地獄に落とし能力に目覚めた。血の池地獄で微笑む少女は教官たちさえも震え上がらせた。

『あの女に怨まれたら、明日お前の机の上には花瓶だ』

『とんでもないですよ。串刺しトルコ兵は勘弁です』

セツナに話した末の対策だった。ミナヅキ卿は『脳研』在学時、彼女となるべく関わらないようにしていた。劣等感がヒトに能力を目覚めさせる。

彼女の罠は執念…いや、憎悪の化身だ。より一層気味が悪い。

「薄汚い化物に堕ちたな。そのケーブル引き千切ってやるよ!!」

ミナヅキがレールガン本体に近づくのは容易ではなかった。このレールガンの雨はまるで追尾能力を持つミサイルだ。毎秒30万キロメートルのヒトの意思に追い回された。

粒子化により身体が指先から削られていく。さらに心臓の脈がひどく弱まり立っているのも厳しい。ミナヅキ卿はヒトとして生きていくのさえ困難な状況に追い込まれた。

レールガン本体は絶望に染まる敵を嘲笑する。

「クハハ、冥土の土産をあげる。2週間前の牢獄襲撃であたしは逃げ遅れて死んだの。ほらっあたしの腕ね、紫色になってきちゃった。大腦以外は機械で動いているらしいわよ」

「・・・」

「何よ！罨に同化したあたしを嘲うの？でも、死んだ身体でどう生活するっていうの？あたしはもうヒトじゃないもの！！」

「…サイボーグなのか」

「そうね、なんであたしだけなの！！フミヅキはいずれこの塔を爆破して逃げるはずだわっ！！絶対にそんなことさせない！！あたしのレールガンを360度発射して、人間どもを皆殺ししてやるんだから！！」

彼女が言うとおり、これはもはや人間じゃない。意思をもった機械だ。人類の敵がセツナたちに牙を向ける前に自分が破壊しなければいけない。

ただ、彼女は己のアイデンティティーのために命を犠牲にした。それだけで『生きていた価値』になる。ミナヅキは一世一代の勝負に出た。

「消えるのはレールガンお前だ！！」

ミナヅキ卿は狭い空間で遠心力を利用して加速し始めた。細胞が死滅する断末魔の叫びが聞こえる。V1、V2、V3…その先へ。

「くるくる回ってくるみ割り人形のつもり？まず、手始めにあんたが消え失せろ！！」

ホーミングミサイルのようにレールガンの光線が雪崩れて襲いかかる。その瞬間、原子同士が衝突し合い、大爆発を起こした。瞬時に『トウエルブタワー』が闇へ陥ちた。

？未来の翻訳

セツナは停電の起こったタワーを感情のない目で見上げた。

「このタワーは人間のエゴそのものだ。ヒトはヒトのエゴの代償を払わなければならない」

レールガンがないため、正面入口の黄ガス装置はただの飾りになっていた。

チーン。セツナとボタンは正常に動いてやってきたエレベータを不審な目で見つめた。どうやらバックアップの電力がどこからか供給

され始めたらしい。ついに地獄の門が開く。

2人はこの箱の中でお互いに顔を合わせることなく、さらに一言も話すことなく立ち尽くしていた。自由を奪われた小鳥の緊張もこんな感じなのか。だから自由を求め闘う。彼女たちは決意を静かに胸の内で燃やした。そしてドアは開く。

画面を破壊され沈黙するコンピューター、床に散乱する書類。そして女が目を見開いたまま、脳漿を垂れ流し事切れていた。

その手の近くに音もなく転がる銃。罪の重さ。ボタンは顔を顰める。

薄暗闇の中、男の嘲笑が鳴り響いた。フミヅキ卿ことサッサであった。サッサはサンプル試験管が入ったケースを床に叩き伏せた。サンプルと記載された瓶が転がる。

「ずいぶん遅かったじゃないか。ムツキ、貴様がまごついていた間にワクチン抗体は全て死活した。見ろ！このワクチンサンプル全て塵クズだ！！」

悲しみで表情が歪んだ。もはやこれまでだ。

「そうだ！手遅れ…手遅れなんだよ！！これで俺の復讐はお終いだ

あ…ククク、ムツキセツナっ！貴様の親父どもに地獄…」

「…で詫びるのは、お前だ」

セツナは足元に転がっていた銃を躊躇いなく撃ち抜いた。サツサは紙の海に沈んだ。硝煙が銃口から静かに上る。セツナは何もない表情で宙を見ていた。

どうやって『塔』の外へ脱出したのかわからない。外で待機していた12卿軍はセツナを迎え入れることはなかった。失敗。その生気のない一言に怒涛が起こる。もはや兵士も暴徒だ。セツナは死を覚悟したのか目を静かに閉じた。

糸がセツナに襲いかかる暴徒と次々と薙ぎ払った。ボタンの前で暴徒が槍に首を吹き飛ばされ倒れた。セツナたちを守るように、キサラギ卿とサツキ卿は立ち塞がった。

さらにカトウ、マツリダも合流した。サツキ卿は気品のある声で叫んだ。

「我々は『暴徒』に対しては手加減しない！例え同じ血が流れる同胞であってもだ！！」

ボタンは最終戦争に目を疑った。国民を守るはずの軍隊は暴徒に堕ちた。そして軍隊をまとめる幹部が、仲間であった彼らに引導を渡そうと立ち塞がる。この国にもはや秩序はない。愕然とした。

セツナは腹の底から叫んだ。

「最終ディアスポラ計画を始動する！キサラギ卿、ボタンは私に付き従い後退！カトウ、マツリダ、サツキ卿はこの場に留まり、暴徒の進行を食い止める！！」

巨体の男、血染め白衣の女、槍の女は、無言でボタンたちに背を向けた。最後の3人の目は鋭利なナイフのようだった。

キサラギはボタンの手を引き走り出す。この刹那に泣くことは許されなかった。止まっている時間がない。セツナはだいぶ先を走っていた。未来はとうとう一つになった。

戦闘の痕だろう。血と肉片が四散していた。硝煙の臭いも相まって、肺から嘔吐しそうだ。もう背後を振り返ることは出来なかった。

「『ディアスポラ』って何なの？」

キサラギは強く硬く握るボタンの手を握り返した。

「俺らが『新東京』から逃げる作戦だ。誰かが逃げ切れればいい」

「逃げるってどこへ!？」

先行していたセツナの足は止まった。キサラギはボタンの手を引き返した。床が崩落している。それはこの先の道までかなりあった。未来はヒトをどこまでも追い詰める。キサラギの沈んだ声にセツナは淡々と答えた。

「…この先に逃げるのか、セツナ」

「この階層のワームホールは向こう岸だ。ここの空間を把握したが、人間がこの穴を飛び越えるのは不可能だ」

「ワイヤー代わりに糸を使って向こうへ渡ろう。『振り子』だ」

「しかし、糸の強度が足りない…」

「やってみなければわからないだろう!!」

キサラギが熱くなる姿に、セツナは珍しく女性らしい微笑みを見せた。頑なな彼女が見せた穏やかな笑みだった。

「行くぞ！いち、にーの、さん！！」

振り子はまずボタンを向こう岸へ無事に届けた。キサラギは紙一重で次に待つセツナの手を取った。命がけの曲芸。

しかし振り子が失速する。この放物線のままでは向こう岸まで届かない。キサラギはセツナの手を投げ捨てた。彼女の身体は向こう岸へ、その瞬間糸が切れた。キサラギは微笑みを浮かべて奈落の底へ落ちていった。

ボタンは声にならない乾いた叫びを上げた。この間にも黄霧の浸食が依然続いている。走るしかない。あのセツナも堪え泣きながら走っていた。ここは生き地獄だ。

「時間変化の三要素を覚えているか」

「タイムスキップ、タイムターン、タイムリセット」

見たことがない巨大なワームホールゲートに近づいていた。おそらくセツナが開発していた『瞬間移動装置』の改良型だ。

初めて背後を振り返った。黄色が迫っている。ゲート一歩手前、セツナの身体は突然止まった。突発性貧血だ。ボタンはもう一度振り返った。迫る死の黄霧。

「走れえええっ！！生き延びろ：」

ボタンにはどうして自分が最後の一人になったか想像つかなかった。『歴史が改変可能であれば、何をもって正しい歴史とするか』そんなの知らないよ！運命は時に残酷だ。

そしてタイムターンがおこった。

（END）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8424o/>

Yellow mist~黄霧~ LAST

2010年11月23日05時27分発行